

過去をく夏

内田征士

通夜の席で、母の遺影から過去を辿っているうちに、取り留めもないことを考えていた。祭壇の中央から眺めている遺影は、たしか数年前に実家で撮った写真を引き伸ばしたものであった。笑顔でもなく、さりとして悲しみの表情でもなく無表情なままだが、強いていえば顔の皺ばかりが何かを語っているかのような遺影であった。

実家の仏間にこしらえた祭壇の前では、僧侶が読誦し青年の副導師がその声に合わせている。袈裟を纏う二人の僧侶は、父親の墓のある近くの導妙寺という寺から来ていたが、我が家がいつから導妙寺の檀家になったのかなど分らないままだった。導師の顔には見覚えがあった。

今読まれている経文には深い意味があるのであろう。これまで経文の意味など知る機会はなかった。ただ、法事の度に読まれる経文によって死者が癒されると何処かで聞いたことがある。それが本当なら母の癒されていく姿を知りたいと思った。

庭には春になるとピンクの花弁を付ける一本の桜の木が植わっていたが、染まりつつある間に紛れて、葉に被われた木の形がぼんやりと見えた。

八十二歳で逝った母親のつねは、父親の敬三が五十八で亡くなったときから、兄の家族と同居していた。当時はすでに兄も克己も互いの家庭を持っていたのだが、兄はそれまで住んでいた整備工場の社宅を引き払い、この古い実家に戻ってきたのだった。逝くまでの数年の間は惚けが酷くなっていて、克己が顔を出しても、すでに息子とさえ分からなくなっていた。

(どなたでしょうか?)

声には出さなくても、克己を見る顔はそう語っていた。知らない男が親しそうに話しかけるのは、何か魂胆があつてのことではなからうか。そのときの斜めからのぞき込む、幾分怯えたような表情はそういつているようだった。克己の言葉にただ耳を傾けているだけで、それに応えることはなくなっていた。

わが身を痛めて生んだ子であったとしても、やがてすべての記憶は天によって消され、人は個人となって地に還っていく。

克己は別れの日が来るまではできるだけ会いにこようと思ったが、次第に会話が成り立たなくなっていくのが手に取るように分かった。それに実家に来れば、母のつねのことより、兄嫁の苦労話を聞くことに時間を裂かなければならない。ついつい足が遠のいてしまうことがあった。来れば、つねの面倒を見てもらっている負い目があった。彼はただ黙って聞いていることがほとんどだった。

入院した頃になると、誰が訪ねていっても、つねはまるで人の姿など眼に入らないかのように、空を見続けるばかりであった。

小綺麗に改築されていた実家が通夜の場所だった。葬儀もここで行なわれる。通夜や葬儀のすべては兄が取り仕切っていて、克己は兄の横でおとなしくしているばかりいた。もともと人前に出るのが苦手なのである。親戚付き合いのほとんどを兄に任せていた。声を掛けてくる参列者でさえも、簡単な相槌を打つばかりですぐに黙り込んだ。昔は人との付き合いは苦手ではなかったのにと自分でも思う。高校を卒業してから勤めだした工場での勤務が彼を無口にした。

不規則な勤務のせいで、帰宅すると何もする気がしない。段ボール工場で機械と製品だけを見続け、帰ればただ酒をあおる。身体の奥に凝り固まった疲れを追い出すことにだけに専念してきたような暮らしが無口にしたのだ。

克己は数週間前に亡くなったトラック運転手の前田のことを思い浮かべた。多くの人が訪れた葬儀は斎場で行なわれたのだが、トラック仲間や工場の従業員たちが訪れていた。

克己の座る場所からは前田の妻の哀れなほど意気消沈した姿が見えた。最後に残された者たちが参列者ちを見送ったとき、彼はまともに彼女と眼を合わせられなかった。三十八歳になつたばかりの前田の死亡を知ったとき、彼女は会社の長椅子に崩れ落ちた。居眠り運転で信号機に突っ込んで、運転席にのめり込んだ鉄柱のせいで、前田はそのまま逝った。打ち所が悪かったのであるが、おそらく彼は眠ったまま息が途絶えたのであろう。

事故を聞いてすぐに前田の妻は会社に駆けつけてきたのだが、夫が亡くなったことをはじめて知った彼女は、顔を蒼ざめさせたまま絶句した。そしてそのまま崩れてい

った。

事務所に報告書を持ってきていた克己は、彼女の到着する前に事故のことを知った。「えっ！それで前田は死んだんか？」

京都の本社から来ていた所長は、辺りに響く関西訛りでそう叫んだ。

「それで？製品はどないしたんや、どもないんか？」

製品には影響がないことを知らせる工場長の低い声に、所長は一瞬畏まった顔をしていたが、すぐに口元を緩めた。

「死んだもんしょうがないやないか。代わりのトラックやって、すぐ製品を積み替えさせる」

間髪を入れずに伝えられた所長の言葉は、人の命よりも製品の方が大事だとでもいうように彼には聞こえた。

「トラックのローンが残っとるけん。それに二人の子供の学費は稼がんとねえ」

働きすぎという克己の冗談めいた声掛けに、製品を積み上げながらそんなことをいう笑い顔の前田が思い出される。ずんぐりとした身体を常に動かし続けていた。克己が出荷口を通るとき、彼はいつもシートを取り外したり、空になったパレットを自分で引き摺り下ろしていた。前田がかなりのスケジュールをこなしているのを工場で見られない者はいなかった。疲れた様子も見せず、精力的に身体を動かしている姿しか克己に残る彼の印象はなかった。

会社は輸送部門に関してトラックを持つということはなく、別の運送会社と契約していた。実際は大手ではなく、低いコストに押さえられる個人トラックとの契約が多い。前田はそのうちの一人であった。不規則に製造される製品が出荷口に送り出されると、そこに控えている何台かのトラックが製品を積み込んでつぎつぎと工場を後にした。彼らは伝票通りの製品を指定された場所へとただ運んでいくばかりである。数をこなすためには天候に関係なく、とんぼ返りで競って製品を運ばなければならぬ。生産予定が混めば混むほど、朝も夜も製品は出荷され続けた。

つねの遺影を眺めているうちに前田の姿が浮かんできて、胸の奥で重たいものが塞がった。

- 前田さん、あなた、何のためにあんなに働き続けたんかい

そういいたい思いに駆られてまた母の遺影を見つめ直した。

僧侶たちはすでに去り、残る参列者たちも公民館に用意された御齋に向かったようだった。妻は手伝いに公民館に行った。子供たちも一緒に出ていったようだ。傍には兄と義姉がいる。二人とも気の抜けた様子であった。

「祖母ちゃんも大往生だったばい」

兄が克己の方に顔を向けていった。

「ほんなこて。兄貴と姉さんにはずいぶん世話になったなあ。孫たちにも大事にされて、祖母ちゃんも幸せだったたい」

義姉が軽く頷いた。兄たちに感謝しているのは本当である。いつも気の利いた言葉を思いつかないのを気にしながら彼はそんなことを口にした。

「兄弟仲良うしていくこつが祖母ちゃんの願いだっただけん、克己たちやこれからも顔は見せなんぞ」

兄はいつも長男としての責任感で物をいう。克己も納得していることなのだが、互いに気遣い合つて、ときには黙っていることも必要な気がした。今日のようなききはなおさらそんな思いになる。しかし、口には出さなかった。

「今晚な口ウソクの火が消えんように交代で起きとかないかん。子供たちには早めに当番してもらて、後は俺たちが交代でしょうか？今のうちに少してん腹ごしらえばしとくぞ」

克己は独りになりたかったが、俯き加減で頷いた。そして兄夫婦が立ち上がるのを見計らつて口を開いた。

「ばつてん、ここに誰も居らんちゆうこつもでけんけん、交代で食べに行こい。姉さんたちが先に食べちきなつせ」

夫婦は互いに顔を見合わせて考える仕草をしたが、すぐに納得したように部屋から出ていった。

遺体の前では机の上に立つ口ウソクが小さな炎を輝かせ、灰の中の線香から煙が立ち上っている。庭から入ってきたわずかな風が炎と煙を揺らめかせた。頬に少しだけ涼しい風を感じて、克己は昼間の眩しく暑い陽の光を思い出した。酸素吸入のチューブと病院のベッドと息を引き取った母の姿と対照的に、暑く白い外の世界では樹木の葉が光に透けて見えていた。

それからふたたび前田を思い、毎日働いている蒸し暑い職場が連想された。

体育館を幾つかつなげたように広く、冷暖房の利かない仕事場での繰り返しに何か

の意味を求めようとして視線を宙に漂わせた。

フレキシと呼ばれる克己の扱っている機械は、段ボールの板を通すことで、印刷、カッティング、製函がなされた後、決められた枚数だけが紐に括られて出てくる。班長の克己はその機械を担当していた。

糊付けされたロール原紙は、コルゲータという機械の中で、蒸気によって温められた鉄板を通って乾燥され段ボールになる。フレキシに合わせた長さにカットされた上にパレットに積み上げられた段ボールからは、出来上がったばかりの蒸しパンのように常に湯気が出ていた。工場の原紙が納入され積み上げられている箇所、それに反対側の出荷口には壁がなく、絶えず開いてはいるが、プレハブの屋根に受ける真夏の太陽の熱と蒸気のせいで、身体が動くたびにヘルメットの下から汗が噴き出してくる。

フレキシの投入口では、パレットの段ボールの板を二人掛かりで掴み取っては給紙部に積み上げるように置いた。その段ボールはピストン運動を繰り返す鉄板によって次々と機械に送り込まれるのだが、分厚い段ボールの板が機械の中に消えていくスピードはなかなか早く、瞬間にパレットの上の段ボールはなくなっていく。木造のパレットが空になると、急いでそれをレーンから外さなければならぬ。それからレーンの上を送られてきたパレットに積まれる段ボールを、また掴み上げなければならなかった。

シングルの厚さで造られる函というのは、ほとんどが普通の大きさで、元になる板状の段ボールもそう広くはない。したがって、二人でも多くの枚数を掴み上げられるし、機械のスピードにもついていけた。だが、分厚いダブルのものになると、頑丈な、あるいは大きな製品とするためのものが多く、持ち上げ難い上にかかりの重さになった。

班長として、日頃は操作スイッチの傍に立っている克己も、かなりの生産数であったり広いダブルの段ボールのときには、急激に減っていく段ボールのために、パレットを取り除いたり、レーンに乗る次のパレットを押してきたりしなければならなかった。

「暑かなあ」

夏場には挨拶のように毎日誰かがそう口にした。

休憩や昼食のサイレンが鳴ると、工員たちは競うように唯一エアコンの設置された食堂に集ってきては「暑か」と深いため息を漏らすのが常であった。

冬になれば、いつも開け放たれた搬入口と出荷口から容赦なく冷たい風が吹き込んでくる。

「寒かなあ」

唯一ストープのある食堂に集まるたびに、皆は挨拶のようにそういった。

母の葬儀を済ませ最初に迎えた休日の朝、克己は庭越しに近くの公園を見ていた。わずかな雲の浮かぶ青空に夏の光が強く輝いていて、視覚を刺激された彼は思わず目蓋を細めた。

葬儀のときに抱いた、働く意味というものを捜しあぐねていた。つねや若くして死んだ前田のことは、そのまま自分にも当てはまる気がしてくる。これまでただ働いてきた。それは自分が食べるためであり、家族を食べさせるためであった。前田もそうであつたらう。世の男たちのほとんどが、他に特別な意味があるとは思えない。だが、前田と母の死に出会ったとき、なんのためという生きる意味が知りたくなった。哲学的というほど難しいことではない。誰でも一度は考えたことのあることのような気もした。だが、答など出そうにもまたない。自分で納得できさえすればいいのだ。理屈など分からなくとも、自分が生きていくのはこのことだったと自分なりに領ければいいのだ。それが、若くしてこの世を発つていった前田や全うする前に惚けたつねの存在した意味のような気がした。

何処かへふらりと出ていきたくなった。明日から仕事に復帰しなければならぬが、夜勤からである。克己は靴を履いて車に向かった。

美恵子は洗濯をしようとする手を止めて、そんな彼をチラリと見たが、気にする様子もなくすぐに衣類に顔を戻した。

熊本の湿気を含んだ暑い道を、古めかしいアイボリー色の車を操って克己は北へと向かった。車体を受ける容赦のない太陽の熱とウィンドウから襲ってくる光の洪水で、エアコンからのわずかな冷気はすぐに熱風と混じり合って用をなさなくなった。じりじりと汗が滲み出す。

白く焼けたアスファルトの上で景色が揺らいでいた。眩しいほどの夏の光がまわりの風景を飲み干し、陰影のない世界を造り出している。まっすぐに延びるアスファルトと脇に生える雑草との境目が不安定に動き、彼方の信号やコンビニの建物が炎に焼

き尽くされるように揺れ続けていた。

自転車に乗った少年の姿が遠くに見える。途中で曲がったのだろうか、すぐに視界から消えてしまった。炎天下の自転車に乗った少年の出現で、克己は新聞配達をしていた子供の頃を思い出した。

ふと我に返った。陽炎の中に見えた少年は幻なのかもしれないと思う。不規則な勤務のせいで幻想と現実の境がなくなっていた。一週間交代の勤務は、頭の奥を霞みが掛かった状況にする。不規則な勤務を始めた頃に比べると、霞みは少しずつ薄くなりかけていたが、いつの間にか、生き生きとした感性が失われたようにも思えた。もう三十五年も勤めていて、数年後には定年を控えていた。

ミラーに映る頭髮は、頭皮が透けるほどまばらだし、白髪も目立っている。

「父さん、酒の量を控えたら？お腹が出てきてるよ」

数年前に結婚した娘が、昨日来たときそういった。まだ子供がないこともあって、娘の理恵はときどき実家に遊びにくる。理恵は看護婦になり、弟の俊男は希望した通りに料理の専門学校へ通うようになった。

克己が酒を飲み始めたのは不規則勤務のせいである。昼の間に熟睡することができずに、酒を頼るようになった。

二人の子供のことは絶えず気にしているつもりだが、これまで父親として何かをしてやったという思い出を持たない彼は、ことさら子供に向き合う仕草を見せたことがなかった。それでも子供のことになると、それぞれに記憶に残ることもある。

理恵がハイハイをするようになった頃だ。美恵子は理恵を二階に寝かしつけたまま夕食の支度に取りかかっていた。夜勤のための準備をしていた彼の耳に、かすかな理恵の「まあま」という声が聞こえてきた。襖を隔てて上がり口と二階へと通ずる階段の上の方から聞こえるようであった。

そのときだった。襖の向こうに何か落ちる音がした。同時に振り向いた台所の美恵子が叫び声を発した。

「理恵！理恵が落ちた！理恵があ」

走り寄った彼女はすぐに理恵を抱きかかえたが、その顔からはすっかり血の気が失せていた。克己はすぐに二人を車に乗せて病院へと走らせた。幸い、そのときに異状は発見されなかったのだが、理恵の高一の秋に、あらためてそのときの事が思い出された。

理恵の尿からタンパクが出たという身体検査の結果を受けて、彼女だけに精密検査が行なわれたのだが、それによって理恵の片方の腎臓はほとんど機能していないことが判明した。膀胱の弁はほとんど働いていず、逆流した尿のせいで永い間菌に侵され続けた腎臓は、発達しないまま萎縮してしまっているらしかった。

「二階から落ちたとき、膀胱が圧迫されて弁が利かんようになったとです」

医者の前で美恵子はそう主張した。それでもはつきりした原因は分らないと医者はいった。

「そういえばあの子は、小さいときから熱が出やすかった・・・でも、先生は風邪だとしかいつてくれなかった」

美恵子は何度もそういった。

年が開けると、理恵は腎盂尿管を切断し、あらためて膀胱壁を弁代わりにするという手術を受けた。手術は成功したのだが、理恵は次第に無口になっていった。

一週間が過ぎた頃、彼女は美恵子に独り言のようにつぶやいたのだった。

「検査のときも手術のときも、男の先生に大事なところば見せたとよ」

術後の検査では、克己は美恵子と永い時間を待合室で待たされた。検査室から出てきた理恵は車椅子の上になげられた点滴の下で、真っ赤に腫らした眼に白いタオルを強く押し当てていた。

それまで子供たちの気持ちなど理解できないでいた克己の耳に、聞こえないはずの押し殺した娘の泣き声が、そのとき聞こえてきた気がした。

そんな経験をしたせい、ある日理恵は看護婦になりたいといった。

「父親と走るプログラムのあるけん、ぜひ参加して」

運動会に参加しても途中で帰ることの多かった克己に対して、美恵子がそんなことをいったのは、俊男が小学四年のときである。

トラックの反対側に別々に立った親と子が合図とともに同時にスタートし、合流したところで我が子を背負った父親がゴールを目指すという競技だった。

ピストルの合図とともに彼は誰よりも早く走り出した。運動らしい運動をしたことのない克己であったが、肉体労働を伴う毎日の仕事と、走ることで負い目を感じたことのない学生を思い出して、口頃見せたことのない姿を俊男に見せたかった。

合流地点にまで来ると、眼に入った俊男をすばやく自分の背に負った。だが、その瞬間想像以上に俊男の身体の重さに驚いた。ゴールのテープを一度見た彼は、踏み締めるように足を踏み出した。だが、踏み出した右足は思いどおりの動きが伝わらないまま反対の足に絡まってしまった。前のめりに倒れる様がるでスローモーションのように感じられ、ゆっくりと土が眼前に迫るのが彼には見えた。それでも、背中の俊男だけは頭から落としてはならないと身体のバランスを取っているうち、顎を大地に強く擦り付けてしまった。

やっと顔を上げると何もかもが白く薄らいで見えた。心臓が波打ち開いた口にうま
く空気が吸い込めない。他の親子たちは克己たちを次々に追い越していった。

彼はしばらく眼を閉じていたが、やがて諦めたように身を起こし、傍に立ち竦んでいた俊男の手を握り締めた。そして、ゆっくりとゴールに向かったとぼとぼと歩き出したのだった。張りつめたような静寂の中で、次第にざわめきやピストルの破裂音が戻っていった。同じ作業ばかりを毎日繰り返す彼の筋肉は、走る動作のものがすっかり退化してしまっただかのようにであった。

・・・もつと、シャンとせんと

・・・たまには母さん連れて温泉にでも行って来たら？

・・・仕事どう？きつくはない？

ありきたりな言葉だが、昨日そんなことをいった娘に、克己は感慨を覚えて眼を細めた。二人とも大人になったなと、太陽の眩しい光を浴びながら、両手を軽く離すとハンドルをポンと叩いた。

菊池の温泉街に近づくにつれて空には雲が覆い始め、桜の木の繁る城山を過ぎる頃にはエアコンの風が冷たく感じられた。夏休みで訪れている家族の歩く姿が眼に付いた。桜の葉の重なる道の向こうには菊池神社がある。その先にあつた藪の辺りは今はもう綺麗な歩道があるばかりであった。小学生の頃、重男と一緒に来た小さな沼の跡が奥に見えた。

三百部ほどの新聞を配っていた病弱な父親のために、克己は小学の五年のときから夕刊を配ったことがある。重男は同じ配達所で知り合った。重男はたかだか数十部を配っていたのだが、毎今朝刊と夕刊を配っていた。

一度、眠い眼を擦りながら、チラシを朝刊に挟む作業を手伝ったことがあった。戸惑う克己、

「綺麗に重ねたチラシの角は折っておくと取りやすかよ」と教えてくれる重男は骨太な体格をしていた。

「克つちゃん、どじょう取りに行こう」

ある日、彼は克己を神社の裏まで連れていった。歩く度に手足が傷つくほど身体中に覆い被さる藪をかき分けて行くと、その先に泥の沼が現れた。重男はみずから泥の中に右足を沈ませ、底に届いたのを確かめた後で反対の足を泥に入れた。それから慣れた様子で奥の方へと進んでいった。

「ほら、いっぱいあるぞ」

右手で掴んだ泥だらけのどじょうを空の弁当箱に落とし込んで見せた。

克己も同じように片足を泥の中に沈み込ませたが、なかなか底に届いた感触が掴めなくて倒れそうになった。やっと沼に立つことができたのだが、今度は前に進もうとしても重男のようにはうまく進めない。しかたなく、その場で泥水の中に両手を潜らせてみると、すぐに手の先にくくねした感触が伝わってきた。

「取った！取った！」

嬉しそうな克己の様子に、重男は笑ってみせた。何度かどじょうを掴み取っては弁当箱に移していたが、克己は次第に両足に変な痛みを感じるようになった。はじめは足がちくちくしていただけだったが、そのうち、以前患った関節炎にも似て芯の方から痛みが這い上がってくるような気がしてきた。様子を見ようとしたが、ぬかるむ泥は残りの足を不安定にした。彼は沼に垂れ下がる雑草の根元に手をつき、片方の足を引き摺るように引き上げた。やっと現れた泥だらけの自分の足を見た克己は悲鳴を上げそうになった。足中に張り付いた泥の間で何かが蠢いているのだ。一つ一つが動いていて、小さなそれがどじょうでないことはすぐに分かった。何十匹と這いずり回るように蠢くものは、どれもが別の意志を持っていて、それぞれが違う動き方をしている。ヒルであった。あまりに多くのヒルが克己の足にとり付いて、足全体に痛みが襲っていたのだった。

背筋が寒くなるほどの恐怖に耐えながら必死で剥がそうとするが、まるで皮膚の中にその身を潜り込ませてもしているかのようにヒルは強く吸い付いていた。摘んで引っ張る度に身がゴムのように伸びるばかりで、なかなか皮膚から引き離せない。

「克つちゃん、どうした？」

重男に声を掛けられて彼は泣きそうになった。でも泣き虫と思われたくなくて、克己は眼を瞑り一と呼吸してからいった。

「何でもなか。ヒルが吸い付いたと」

駐車で降りた途端、菊池溪谷のひんやりと湿った自然の匂いが克己を包んだ。駐車場から道を横切り売店まで来ると、その横に一番目になる朱色の橋がある。そこを渡ると苔が大地を被っていて、しっとりした匂いを漂わせながら、樹木の間を丸太の埋め込まれた小路が続いていた。脇に生える樹に名札が掛けられている。

彼が踏み締めるように小路を進んでいると、やがて豪快な水の音が彼の耳に届いてきた。岩を縫つように集められた清水が大岩の間から滝となって落ちていたのだ。滝の落ちていく様と下の淵を恐る恐るのぞき込む幾人かの若者たちが見えた。

二つ目の橋は幾筋もの大小の滝が流れ落ちる滝壺の上を通っていた。葉の茂みに隠れた岩からも流れ出ている、本流と小さな滝が眼の前の四方を取り囲んでいた。その橋を渡ると元の道に出た。さらに奥へと進んだところには、樹木の下に東屋を長く広げたような休憩所の小屋があった。小屋の下には平らに広がる広河原の流れが望めた。克己はそこには寄らずに、小屋の横から河原まで降りていった。そこには吊橋があった。吊橋への階段の横には、誰かが置いたかのように人の高さほどの岩が立っている、岩の先には苔の生えた岩棚が覗いている。そして水面近くにある岩棚の横には、浅い清水が広がっていた。彼は腰を屈めて岩の下を潜り抜けて岩棚に座り込んだ。冷たく水面を吹き抜ける風が心地よく彼の渗んだ汗をさらっていった。

空にはいまだに薄い雲が太陽を隠している。その曇り空の淡い光は溪谷の風景を墨絵のように淡泊なものにしていた。

眼を向けた向こう側の岸に、流れに素足を落としている若い女と川上の方に顔を向けたまま岩に腰を落としている青年がいた。やがて浅い溪流の中を歩き始めた女は、途中で振り返って男に何やら叫んだが、せせらぎの音はその声をさらって打ち消した。裾を上げ両手でバランスを取りながら、女はふたたびゆっくりと移動していった。青年は幾度となく頭を上下させながら、水面に触れようとでもするかのようには手を伸ばしている。

眺めているうちに、克己には青年が水彩の筆を水面に浸しているのだと分かったが、

いつの間にか女は何処かへと消えていた。

「克つちゃあん」

何処からか懐かしい子供の声が出た。澄ました耳にふたたび同じ声が聞こえたように思った。必死に声の主を思い出そうとして向けた視線の先に、汚れた詰襟の重男の姿が見えた。

重男が中学を卒業したときから会ってはいない。彼は集団就職をしたまま帰ってはこなかったが、数少ない青春の思い出の中にはいつも彼の姿があった。

城山の奥の行き止まりに重男の家があった。低い板葺きの小屋の傍らには、無造作にガラクタ - 竹ザルや戸がなくて壊れた棚などが埃を被っていた。壁の板はいまにも剥がれそうだったし、穴だらけの戸口は中途半端に開かれていて、下の土に支えられて辛うじて立っているようであった。入り口はなぜか左右二つにあった。

夕暮れのわずかな光は小屋の奥へは届かないでいて、克己が眼を凝らして見ても、中の様子は分からないままだった。

「克つちゃん、見晴らしがよかるっ」

振り返った克己の眼下には暮れなずむ町並みが広がっていた。

地平線近くの雲は茜色に染まり、夜の訪れよつとする空に点在し紅く染まった雲は、すでに大地に隠れた太陽の残り陽に黄金色に縁取られていた。空はみるみる色を失っていく。影にはすでに闇が迫り始めていた。

納屋なのであるうか、庭の隅にある小さな小屋の中で重男のマッチを擦る音がした。彼が壁にある瀬戸物にマッチの火を近づけているところであった。小さな炎が湧いてきて暗がりの中で揺らめきながら大きく頼りなげな人影を小屋全体に映し出した。土の感触のする床には、汚れに違いない変色した毛布が敷きつめられていた。辺りに強い匂いが漂っている。重男の行為を真似て毛布の先を足に絡めたが、その拍子に、様子を伺うような濡れた視線を毛布の先に感じて、おもわず克己は「ひっ」と声を上げた。

「うちの犬たい」

声を発しない大人しそうな犬を一瞥しながら重男がいった。犬は毛布の間から鼻先だけを向けている。そこで克己は気が付いた。ここはとても大きな犬小屋だったのだ。一度外に出て帰ってきた重男の後には、手に毛布を抱きしめる男の子が立っていた。弟の隆男だと紹介された男の子は照れくさそうにへへへと笑った。

中に座った重男の懐盛りから三つの馬鈴薯が零れ落ちた。焦げ目が付いている。さらに重男がポケットから取り出した小さな新聞紙の切れ端には塩が乗っていた。

「旨かぞ！食おう」

はじめて食べる焼いた馬鈴薯は、それまで味わったことがないほど美味しかった。詰まりそうになって、古いアルミのヤカンの口から水を飲んだ。それが夕食だった。食べ終わると三人は外へ出た。

冷たい月の光が板葺きの屋根や辺りの木々を照らしている。

「隣には誰か住んどると？」

「婆さんが一人で住んどる」

重男がそう囁いたとき、月明りの影に隠れた彼の口元が大人びたように歪んで見えた。

「婆さんなときどき男ば泊める。金は貰って男と寝つとたい」

克己には何か別の世界の事のように聞こえた。

「婆さんて若い人ね？」

「いいや、皺くちや婆さんたい」

隆男が下品そうな笑い声を上げた。

「さあ、寝よう」

何事もなかったように重男は犬小屋の方に向かった。その拍子に月光が彼の顔に当たったが、もう怪しげな表情は何処にもなかった。小屋の中で横になると足が伸ばせなかったが、それでも三人は薄っぺらな毛布に包まって眠りに就いた。

重男の話したことは子供が話題にしてはならないことのような気がしたが、すでに克己には想像だけが勝手に動き始めていた。次第に胸が高鳴り、知らずのうちに、板の間から婆さんの住むという方へと顔を向けていた。

灯の消えた狭い犬小屋の壁の隙間から月明りが差し込んでくる。克己は犬の匂いと湧き出る不思議な感情のせいで、その夜はなかなか寝つかれなかった。

川面を伝いながら冷やされた風が心地よかった。

気を取り戻し、ふたたび元の道に上って帰りの道を辿ったのだが、途中清水を深く湛えた淵があり、彼は思わずそこに引き寄せられるように立ち止まった。これまでの風景を遮断されたような闇が潜んでいた。取り囲むように不揃いに立つ樹木が重く静

かな空気を取り囲んでいる。視線を注いだ深い水には暗い群青が蓄えられていて、木々の葉から零れるように滲んだ光は、わずかに描かれる波紋の筋だけをなぞっていた。そしてその波紋は暗い岩の陰へと消えていく。深みの漂う清水には闇と静寂とが兼ね備わっていた。

引きつけられるままじっと動かないでいた克己の前に、突然一条の光が差し込んだ。光は闇を貫き不透明な群青の水の中を一瞬にして金色の光で彩った。わずかな細かい光の線を移動させていた波紋はその強く揺れ動く姿を現わし、底から反射され金の色を幾通りもの彩りへと分散し、その輝きの中で幾筋もの影を表出させた。水面にはひとときわ鮮やかなエメラルドグリーンが現れた。

どれほどの時が経ったのかさえ分からない。彼がふと空を見ると、いつの間にか雲を切り裂いた太陽が溪谷のすべてを照らし出していた。それまでの墨絵のような淡い色の風景は消え、油絵のような激しい色合いが辺りを照らし出していた。溪谷に沿って立つ深緑の樹木や草や蔦、苔むす岩肌が眩しい陽光の下で調和を奏でながら広がっている。時折透明な鳥の囀りが響いていた。

つねの四十九日の法要が実家で行なわれた。葬儀で世話になった僧侶が、あの日と同じように経文を唱えて帰っていった。

兄夫婦の家族と克己の家族とだけが惣菜屋から運ばれてきた料理を食べた。

もう往生を遂げた母を悲しんだりすることもなく、二つの家族はそれぞれの子供たちの近況を語り合った。

「宏んとこは大企業だけん、安心たいね」

身内ばかりの席で無口を通す訳にもいかず、克己は今日の日のために名古屋から帰ってきた兄の長男を誉め上げた。彼は車のメーカーの工場で働いていた。

「なあん、伯父ちゃん、どこでもリストラの話はある。おまけに、どっかのメーカーみたいにリコールとか問題が出てくりゃあ倒産だっつてしかねんよ」

宏からはあまり熊本の方が出ることはなくなっている。宏の言葉に彼の弟も深く頷いた。弟の方は地元で車の営業をやっていた。社会問題になっているM社のことを思い出してつまらぬ話題を持ち出したと克己は反省した。

先日兄が克己の前でいったことを思い出した。

・実家は自分が譲り受ける。

克己はそれに反対はしなかった。克己自身、兄には世話になってきたし、つねの面倒をみてもらったこともある。誰が考えても当然のことである。今日はそんな話ができることはなかった。子供たちの話が一段落すると、静かにしていた兄が口を開いた。「残された我々がこれからも仲良く暮らしていくことが、バアちゃんの供養になっただけん、皆分かっとなね」

それまで隣と話をしていた者や箸を握った子供たちも一様に「分かった」と頷く。

「克己んとも何かあったら今までんこつ相談してこいや」

これまで長男としてすべての面倒を見てきた兄には彼は何も逆らえなかった。

子供たちが別の部屋に引き籠り、兄貴は風呂に入るといつて部屋を出ていった。義姉と美恵子は食堂の椅子に腰掛けながらおしゃべりに興じている風だった。克己は一人コップ酒を手に仏壇に向かっていた。

・母の一生は満足だったのだろうか、

そんな思いにかられながら手に持つコップを口に寄せた。

ふと、背後に何かの気配がして振り返ると、逆光の中に一人の老婆が立っていた。部屋の中には他に誰もいない。わずかに腰が曲がり、彼をのぞき込むようにしているのが蛍光灯の照り返しでうっすら浮き上がっている。その様子は夕闇の中で彼の背後に立ち、笹囁き声を発したある日のつねを思い起こさせた。

克己は母が蘇ったのかと胸が高鳴り、幾度も老婆の顔の輪郭を辿った。

つねの亡くなる半年ばかり前に、克己は美恵子と一緒にここに訪ねてきたことがある。

惚けは酷くなっていたが、母はまだ入院するほどではなかった。部屋に籠もるか徘徊を繰り返すばかりで、他人に害を及ぼすほどのこともなかった。

兄は不在といつので、奥で寝ているつねをそのままにして、義姉を相手に美恵子はしきりに世間話を繰り返していた。克己は傍で黙ってそれを聞いている。しばらくすると、義姉は美恵子を連れて買い物へ出ていってしまったのだが、手持ち無沙汰の克己は茶を飲みながらぼんやりと庭を眺めていた。

庭の隅には小さな花壇がこしらえてあり、百日草が可憐な花を覗かせていた。やがて落ちよつとする陽と湿気を含んだ空気が、蒸し暑い初夏の中で絡み合っている。し

だいに暮れなすむ夕陽が、小綺麗な実家のたたずまいを隠し去り、かつての昔のくすんだ家へと戻っていた。

記憶の父は腺病質な痩せた身体をしていた。煙草を飲むではなく晩酌をするでもなく、三百部ほどの新聞配達をしながら妻と二人の息子を養っていた。それだけで暮らしていけるはずもなく、母のつねも食堂の手伝いをしていた。

父の敬三はときどき新聞の営業もやったが、何も無い日には庭の手入れをやって過ごしていた。息子たちに声を掛けることはあまりなく、会話といえば克己たちの話しかける言葉に相槌を打つほどであった。

「学校は楽しかいかい？」

ある日、今彼の眺めている庭で、父は草むしりをしながら傍にいる中学生の克己に聞いてきた。どう応えたのか忘れてしまったが、はじめて父と語り合った記憶となつて、その時のことがいつまでも残っている。夕刊の配達を手伝っていた彼は、父とはそれまでにも会話を交わしていたはずなのに、すべてが忘れ去られていたのだった。

その頃すでに兄は市内の整備工場に勤めていた。弟である克己だけが高校に通つたが、進学したことで「学校は楽しかいかい？」との父の言葉とが、克己の心の奥ではいつまでも結びついたまま記憶されている。

陽が落ちてしまつて部屋にあるものが薄れて見えた。彼は明かりを点けないで昔を辿つた。

すっかり暗くなつた部屋にいて、克己は何かの気配を背後に感じた。音もなく、ただ何かが圧迫してくるのである。ゆっくり振り向くと、そこにはつねが立っていたのだった。

闇の中で庭の方から差し込むわずかな光に照らされながら、静かに何かに挑むように、険しい顔が目の前に存在した。

彼女は大きく見開いた眼と力一杯寄せた皺を、辺りに漂う暗さの中に浮き上がらせていた。つねの口元がわずかに動いた。

「敬三さん……」

彼は叫びそうになつた。それほど、突然現れたつねの顔が印象的であつた。

ちょうど、美恵子たちの帰ってきた音を耳にしなれば、身体は恐怖で動かせないままであつたらう。克己は救われた思いがした。兄嫁によって居間の明かりが点され、つねは蒲団に戻された。

もともと母親が泣き言や口やかましくいうのを見たことはない。父が亡くなってからはさらに無口で静かになった。家族には心配など掛けたことのない良いお祖母ちゃんであった。つねは惚けながら薄れていく記憶の中で、父との思い出を辿り続けたのかも知れなかった。

何度もあのときの母の顔が思い出される。克己の背後に無言で立っている老婆の姿は、四十九日の日のためにつねが蘇って目の前に立っているようであった。老いた顔の皺が闇に浮かんだ母の姿を思い起こさせて胸が締め付けられた。

そのとき兄嫁が部屋に入ってきた。

「克己さん、ほら、お祖母ちゃんと仲良しだった近所のりく婆ちゃんたい。四十九日のお参りばしたかて、わざわざ来なはったつよ。そこは開けて」

彼はやっと気がついた、そこにあるのはつねの顔ではなく近所の老婆のものである。無表情な顔と薄く開けられた眼がぼんやりと一点を見つめていた。

ああ、と頷いた克己は仏壇の前から身をずらせ立ち上がった。

そのまま庭に降りると、夜の空を見上げた。空気は澄んでいたが、昔ほどの星の輝きは見えなかった。冬の未明に新聞の配布を手伝ったとき、零れるほど多くの星が煌めいていたのを覚えている。あのとときと比べて空気がくすんでしまったのだろうか、ほとんどの星は見えなくなってしまっていた。世の中のすべてがくすんでしまった気もした。

しばらくすると近所の老婆が帰っていく気配がした。足下に眼を移そうとして視線を動かしたときに、空の片隅に強く光る星を見た。それはもう決して還ることのない昔を思い起こさせる幻のようにも思えた。

塀に囲まれた小さな庭の隅には、町の照り返しさえも届かない闇が存在している。塀の向こうで、家族であろうつか数人の乱れた足音が通りすぎていった。皿や茶碗を片付ける様子が伝わってきて、ふたたび皆が集ってきたのか、室内のざわめきが聞こえだした。

身体を包む自然の中に、すでに秋が忍び寄っているのを克己は感じた。

(終わり)